

子  
火

白秋全集  
8

8 歌集  
3

白秋全集 8

第八回配本(第1期一と二四卷)

一九八五年七月五日 発行

定価三四〇〇円

著者 北原白秋

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目  
一丁目 鐵岩波書店

電話 〇三二五二二  
振替 東京六上云二〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 目次

## 『観相の秋』

序	五
その一	
簡素な庭	九
ある人の庭	一〇
紅葉を焚いて	三
山中消息	七

その二

秋山の歌 . . . . . 三五

黎明の不尽 . . . . . 三六

遠山脈の歌 . . . . . 三九

湯どころの秋 . . . . . 三三

秋山の歌 . . . . . 三三

孟宗と月 . . . . . 三三

竹と曼珠沙華 . . . . . 三五

竹の林の歌 . . . . . 三六

蝸の歌 . . . . . 三六

岡の鉾杉 . . . . . 三九

榎と栗 . . . . . 四〇

孟宗と月 . . . . . 四三

荒浪千鳥の歌 . . . . . 四四

冬の山そば・・・・・・・・・・・・・・・・三

冬の山唄・・・・・・・・・・・・・・・・四

冬の日棚田・・・・・・・・・・・・・・・・五

落葉行・・・・・・・・・・・・・・・・五

落葉吟・・・・・・・・・・・・・・・・三

竹林の早春・・・・・・・・・・・・・・・・五

水仙と菊・・・・・・・・・・・・・・・・五

聴けよ妻ふるものあり・・・・・・・・七

元旦の夜のこと・・・・・・・・・・・・・・・・五

露の臺・・・・・・・・・・・・・・・・六

竹林の早春・・・・・・・・・・・・・・・・六

ころころ蛙の歌・・・・・・・・・・・・・・・・三

立枯並木の歌・・・・・・・・・・・・・・・・空

立枯並木の歌・・・・・・・・・・・・・・・・空

潮来の入江・・・・・・・・・・・・・・・・七

夜の雪 . . . . . 六

鳥の啼くこゑ . . . . . 六

米の白玉 . . . . . 七

アツシジの聖の歌 . . . . . 七

米の白玉 . . . . . 七

犬と鴉 . . . . . 七

童と母 . . . . . 八

麻布山 . . . . . 八

童と母 . . . . . 八

その三

ほのかなるもの . . . . . 八

ほのかなるもの . . . . . 八

『篁』

序	101
竹と我 序歌	103
言 祝	104
言 祝	104
最勝閣にまうでて	104
最勝閣にまうでて詠める長歌ならびに反歌	104
春 鴟	111
冬ごもり	111
日あたり	111
ととのはぬ春	113
をさなき春	114
見え来る春	114
福寿草	115



春 鴉	二六
あるとき	二七
のどか	二七
つくし	二八
種子蒔き	二九
このごろは	三〇
双柿舎	三〇
多摩の浅春	三三
造り酒屋の歌	三四
餅搗きの歌	三五
道のべの春	三七
木彫の人形	三九
月光と魚	四〇
魚売り	四一
米と雁	四一
荒彫の牛	四三

〔水仙と菊〕

浅 春・・・・・・・・・・・・・・・・三六

〔孟宗と月〕

孟宗と月〔反歌のみ〕・・・・・・・・三七

〔秋山の歌〕

水之尾の秋・・・・・・・・三七

〔岡の鉾杉〕

榎と栗〔反歌のみ〕・・・・・・・・三八

〔米の白玉〕

米の白玉〔反歌のみ〕・・・・・・・・三九

〔童と母〕

麻布山〔反歌のみ〕・・・・・・・・四〇

童と母〔反歌のみ〕・・・・・・・・四〇

老いしアイヌの歌 . . . . . 一四一

老いしアイヌの歌 . . . . . 一四二

長歌創作年表 . . . . . 一四七

### 初出(雑誌・新聞)

〔一九二二(大正一一)年〕 . . . . . 一五一

観想の時 長歌体詩篇(二)(三)

黎明の不尽 遠山脈の歌 竹と

曼珠沙華 竹の林の歌 蜩の歌

湯どころの秋 秋山の歌 岡の

鈴杉 樫と栗 孟宗と月 冬の

山祖 冬の棚田 荒浪千鳥 落

葉行 落葉吟 水仙と菊 竹林

の早春 元旦の夜のこと 露の

臺 聴けよ妻ふるものあり

ころころ蛙の歌

〔一九二三(大正一二)年〕 . . . . . 一五一

弱陽の崖 六三首(七〇)

白菊 同じく四首 草の穂 か

やの実 籐椅子の上 葉鶏頭の

種子 弱陽 冬晴 月と孟宗

樫と栗 百日紅 このお父さ

菊の花 寺の鶏 唐黍 茗荷の

宿 磯寺

函嶺の冬 一五首(七五)

早川上流 蘆の湖 箱根旧道

茨の笑 短日 たまたまは 葉

鶏頭 椿一首

半島の早春 一三七首(七六)

三浦三崎

ぼろ自動車の上 良夜行 北条

入江 月と太鼓 臨江閣

八景原

椿 女仏 崖の上 八景原 舟

上

城ヶ嶋

菅原 老嫗 鳥鶉 遊びが崎

大椿寺

長 井

水あかり 安旅籠 鯛子の函

海苔 小竹の村 丘窪 立枯銀

杏 暇あり 高畑道 風の下り

坂 長井遠望 県道へ出る道

林新道 入江の上

早春の行楽 一九三首(八六)

箱根山麓の歌

山の梓杉 杉日和 伝鑿寺の朝

堂ヶ島の雪 早春の朝餐 統堂

ヶ島行(風祭村湯本駅 登山電

車 堂ヶ島) 丘の昼餐 弟を迎

へて 白梅五品 春夕閑

多摩川上流の歌

途上 桑の曠野 多摩川上流

酒と餅 杉の谿 山菅 雪の山

道 山上の黎明

山荘の晩春 七五首(一〇三)

水野尾道の春 霞を愛す 独居

の春 庭前小情 水野尾の晩春

春雨 竹藪の春 山寺の春

印旛沼吟行集 六首(一〇九)

梅雨の山寺 一首(一一)

初夏の印旛沼 八二首(一一三)

印旛沼展望 千樫と歩む 昼餐

舟に乗る 楊の絮と鯉網 萩と

莎草 母馬仔馬 葦間の明暗

鳩 夜食

藤と松蟬 一四首(一一八)

印旛の葦 四四首(一二九)

印旛囃子 里神楽 麦搗踊 黎

明 補遺六首(七) 吉植翁 吉植

氏令夫人に 吉植君に

信濃高原の歌 二六七首(二三)

落葉松林の中に

落葉松林に添ひて 追分の油屋

まで 雨後の夕 細雨の朝 雨

にこもる 追分の宿

放牧の絵馬

序歌 絵馬師 馬主 群馬 春

駒 をはりに

七久里の落

観音の暁色 春暁 春朝浴泉

観音の春昼 湯の町 安楽寺

独活畑 常楽寺 春夕散策 水

沢行

農民美術の歌

鐘が鳴る 開所式と丘の上の宴

会 木の鉢その他 彫刻人形

染色―凶案

どうだんの雨 五首(四七)

山荘にて 東声庵にて

塩原塩湯にて 一首(三七)

塩原の夏 四三首(四七)

宇都宮一首 西那須駅まで 電

車に乗る 浜の残暑 林の道

浴泉俯瞰 浴泉の処女 須巻を

下る

青い陽 八首(三五)

〔一九二四(大正一三)年〕 . . . . . 三五

茶の花 一七首(三五)

無題 一首(三五)

震前震後 一六首(三五)

朝光夕光 一三首(三五)

星宿観望 二五首(三五)

御穂宮 浅宵舟行

不二大観 長歌一首 短歌一七三

首(六)

不二を仰ぐ 最勝閣に着く 最

勝閣にまうでて詠める長歌なら

び反歌 不二大観 不二の暁色

海苔とり舟 柑子照る宿 午前

の散策 不二の夕照 雨にこも

る 小閑 小夜 早朝 御穂宮

羽衣伝説 三保の松原 竜華寺

浅宵舟行 星宿観望 曉雲重疊

浅春舟行 五八首(三七五)

深靄 沼の返照 櫓の音 微塵  
光 つばき 春雨小景

山葵と独活 三三首(三七九)

爺さ云はく 小閑 身辺 木會  
川橋畔に：

隣の春 長歌一首 短歌一四首

(三六一)

冬ごもり 反歌 日あたり 反  
歌 をさなき春 反歌 見え来  
る春 反歌 福寿草 反歌 春  
鳴 反歌 あるとき 反歌 の  
どか 反歌 つくし 反歌 種  
子蒔き 反歌 このごろは 反  
歌

木彫の玩具 長歌四首 短歌三首

(三八五)

月光と魚 魚売り 米と雁 反  
歌 荒彫の牛 反歌

ある日の散策 一〇首(三八七)

碓氷の春 三五首(三八八)

碓氷の春 鉢泉道 早春 塩沢  
村 胡桃わりつゝ 乳牛 翁ぐ  
さ 浅間山麓にて

葛飾抄 一八首(三九〇)

山莊の立秋 七一首(三九二)

草の香 小閑 寒蟬 茅蜩 向  
日葵 青萱 庭の一隅 雨の日  
虫をきく 竹林の書斎に病床を  
移して 白月天にあり 夕涼  
朝涼 前敷 藪茗荷 菟蓐 夕  
風 病快し 火星 伝聲寺の立  
秋 小さき釣鐘は地上に据ゑた  
り： 旧曆七夕 午の庭にて  
ある月夜 月満つ

野分の頃 一〇四首(三九九)

隣の秋 この頃身を惜む心深し  
節酒の箴 病はかばかしからず  
朝顔も盛り短し 百日紅隣寺に  
咲く 糸薄穂に出づ 墓丘 水  
引 秋夜団欒 良夜 テニス 水  
はじむ 寝顔 母と子の夜 竹  
窟観雨 おなじく夜雨 百舌来  
る 芙蓉さく 隣の井の辺  
茗荷竹林に咲く 鴨跖草の盛り  
来る 花生薑屋前に咲く丈高し

細雨尽きず 前庭に洋種の鶏頭  
あり… 白萩 吾が子 葉鶏頭  
の秋 秋夜虫を聴く 月愈々欠  
く或る夜雨 廢屋の夜 向日葵  
枯る 雀暇あり 風殖ゆ 曼珠  
沙華咲く 中秋来る

三保遊行抄 一九首(三〇八)

星宿觀望 早春の雨 海苔の田  
柑子照る宿 清見瀾の夕照 最  
勝閣の小夜 早朝 美穂宮

〔一九二五(大正一四年)〕……………三二〇

竹林逸興 八首(三〇)

冬の日 二一首(三〇)

室内 豆柿

早春 七首(三二)

翁ぐさ から松 追分にて

朱と紫 四五首(三三)

七面鳥 雪景 夕照 土間の鳥

屋 霜の朝 水禽 余寒 浅春

一首

明星ヶ嶽の山焼 二五首(三六)

山荘の六月 一六首(三二)

独り思ふ 藜仲ふ 裏丘にて

栗の花さく ある宵

初夏の光線 三二首(三九)

七面鳥 野へ出て 鯉 菜夷

鉄砲百合 七首(三三)

第二桐の花より

旅より歸りて 四首(三三)

柿の葉 六首(三三)

〔参考〕

『花櫻』……………三三三

「桐の花」より(三六)

「雲母集」より(三三〇)

「輪廻三鈔」より(三三三)

「雀の卵」より(三五二)

「葛飾閑吟集」より(三五七)

『花檉』増補

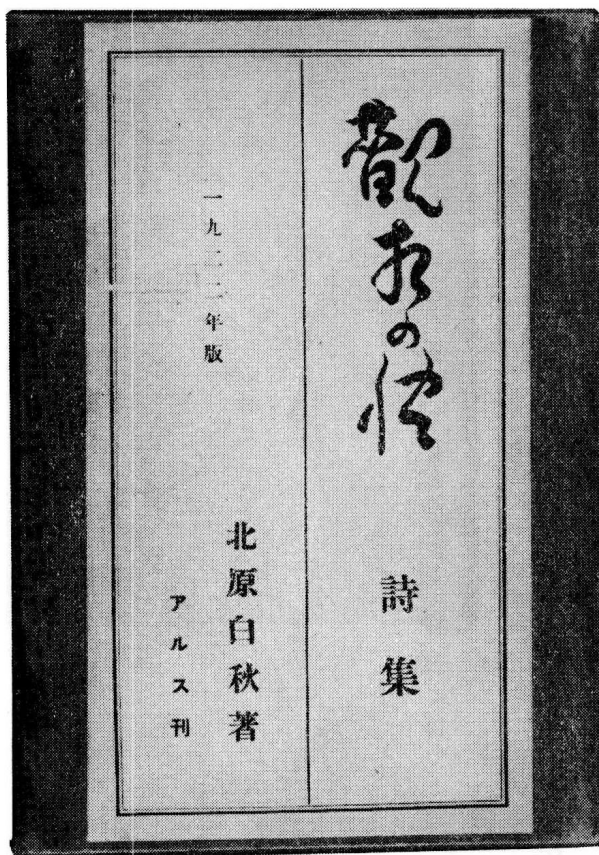
『花檉』改造文庫版巻末に(三六五)

校 異・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三六七

後 記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三六五



『観相の秋』



〔函〕